へ13
2378
217

遠 2378 217

五柳亭徳升作　文政十四辛卯年新鐫

矢猛心兵交

一勇齋國芳画

通油町
鶴屋喜右衛門版

渡邊氏無聲詩堂記

遠 2378 217

萬ゆ心猛きものゝ物の憐を知らざるゆゑ似くれど亦仁ゆ近くして
あの〆ゝ物ゆふまこゝ感情浅おゝ理ゆ逼く怒を催さ
とうや爰ゆ一人の豪傑あり君ゆ仕く忠臣無二ゆ〆怒
まご高木風のたとへ乃ごく竟ゆ悪人ゆ讒せらるゝ二日衰
るとゝゝども諸國武者修行あく其名を天下ゆ東かし
古郷へ萩の錦を飾ゆ彼陸奥ゆ昔語を前後十
巻の冊子となゝ今茲の新撰ゆ具ふるゆ形なゝ

文政十四辛卯年新鐫　五柳亭徳升述

万字屋内玉菊

邑岡十左衛門
繁勝

播州赤穂の
軍學師
養由軒

大星由良之介
義包

小濱屋
おかえ

鶴賀屋
與兵衛

熊谷の剛盗
畑左衛門
後の佛門に入り
俗心なく
号と

高木
虎之助
忠勝

ぶた吉「あら石のかんたんに木わりをうとはいへ
のみむしやまあさまこまうるさきこと
たゞひよおまこてはるりそのらくるを
氏きてるりてとうりはしまるとこと二本ぼ
へすいきよるのよりてこまれ
のけんぶ吉のあちんさ
あせつけられたり
こてはえらを木と
をもむしやまあ
ぎまうのとうらくしうらの
ゑのべあちやまあまのの
けあくとるりんでくく
つれうしこへ木まうのの
とのおのの三まうしまれん
十九オのるしぶ羽の
ぶけなるうんは
してカあまぶ
つくそのくく
ぶあちはは
ひのべられが
むうるんん
ごうのかを
こてもずい
きやうるる

ところぶんくとぶりまんあ吉せて
と二十オはおうひてちろく五百石を
まうしれきいもの吉ちとうとうとうり
あ中のけんぶ吉まんと三の巻へ

三の巻へ
三百五十石ゆえのきくらかぞうのさまをうりれが
ぶきどもりはそのゆもとあくくをうらのくくまもわるよ
あれておごうの氏いとるもゆあちぬまをうぞのめと
むくまうの氏いとるもゆあちぬまをうぞのめと
ろくんあれうすのきようるうるうる氏うとえ
あきことありともろうくはうりうて
とりくみけんのうすぶるよたうるくて
あざけるきとよむちんぐうと

ぶた吉「さうゆくあげらんとすれば
あきうるぜこれをさへぎるとうとうりうるる
こうよ二本れの居下よれあり十たうとしのあり
うとかはらうれんうしが日かむやあまざまうるうて

勇

ぶた吉「うーうあびさすのありくて
又むくまうぶむうあのうあうよ
小ぶやー
あうまと
ゆのの
エとをきて
ゑくく十
をつまの
ぐうり
ひうあ
れば
材ろう
大ぶよ
ひりう
さてく

ぶた吉「こぎ四のあのうれがせんくをのくよんどうう
ゑくすとあきーとうそれーもまうとでんとう
きうくうの何ぶがゆうやーまぶうる
られよさうる兄よあくくうきでんとても
三の巻へ

そこへ

尾張屋
おちりや

氷
酒

虎
定

虎
定

年代記児童講譚

初編〜三編迄

此稗史ハ神代のむかしより年代記ハ当年上梓

補ひ出のうらさびのうを絵ハあらハしとれをよゝあべむかしみ世のうをよくあきらめて童子のうれ者たちとゝもなるべき名ざうし

東庵京山作

年中行事

御祝儀日童講譚

初編〜六編迄

全部十冊

此稗史ハ正月の松うざりを始とし七ゝ子の祝ひ節句のうけのうをゞまぐく十二ゝ月の祝儀日の故事来歴をこまく書たるを絵まあらハし年中の祝ひのうけをまる早学問のあざうしなり

東庵京山作

拳獨稽古

中本

全一冊

袋入

山櫻漣

逸軒 揺舟 合作

この書ハ巻をあのむ巻いまゞ初ゝの官人ゝ方ゝ「ゝ」ゝ根日ゝ

ゝ方ゝ自然とひとりれハ朔日ゝ傍ゝ弄ゝ

戲場顯微鏡

上帙一冊 下帙二冊 彩色入

黙老漁隱著 歌川國貞畫

[illegible]

本朝繡像艶容女仙外史 初編 五冊

黙々漁隱飜案

[illegible]

頭微鏡 後編 萬邦劇場談 上下 二冊

黙老漁隱著

[illegible]

書物錦繪暦問屋仙崔堂鶴屋喜右衛門板

忠臣水滸傳 繪入千冊 東京傳作 讀本

[illegible]

稗史水滸傳 初編六編迄共二十二冊 山東京山譯 歌川國芳画

水滸傳劇場雛形 初編 鶴屋南北作 四冊 歌川國貞画

稗史水滸傳 七編十二編迄寅新板 柳亭種彦譯 共二十冊 天保年間 歌川國芳画

水滸傳豪傑鰤六歌川國芳画

繪本三國志 初編八冊出来 重田貞一譯 歌川國安画

繪本漢楚軍談 初編五編迄 共二十二冊出来

稲妻

外題 國貞画

下

仙鶴堂上梓

2378
217

二の巻の上

[illegible]

つぎへ

遠 2378 217 5止

瀧澤篁民著

迎福南鍼録

一名 相宅手引草 全部五冊 近刻

近来選擇相宅の書世上に出て行れ五車に盈汗牛に充るといへども然ども其法術の為に惑し是を辨ざる人多し是に於てこの書は協紀辨方書に本づきて方位宅相神殺走避の要領を著して吉に就て凶を避禍を禳ひ福を迎ふるの宗とする所のものを學ぶに疎く其を不辨の者といへども解し易く一家の主人その常に坐右に措ときは吉凶悔吝の惑ふ所なく日用有益の良籍なり

右同著

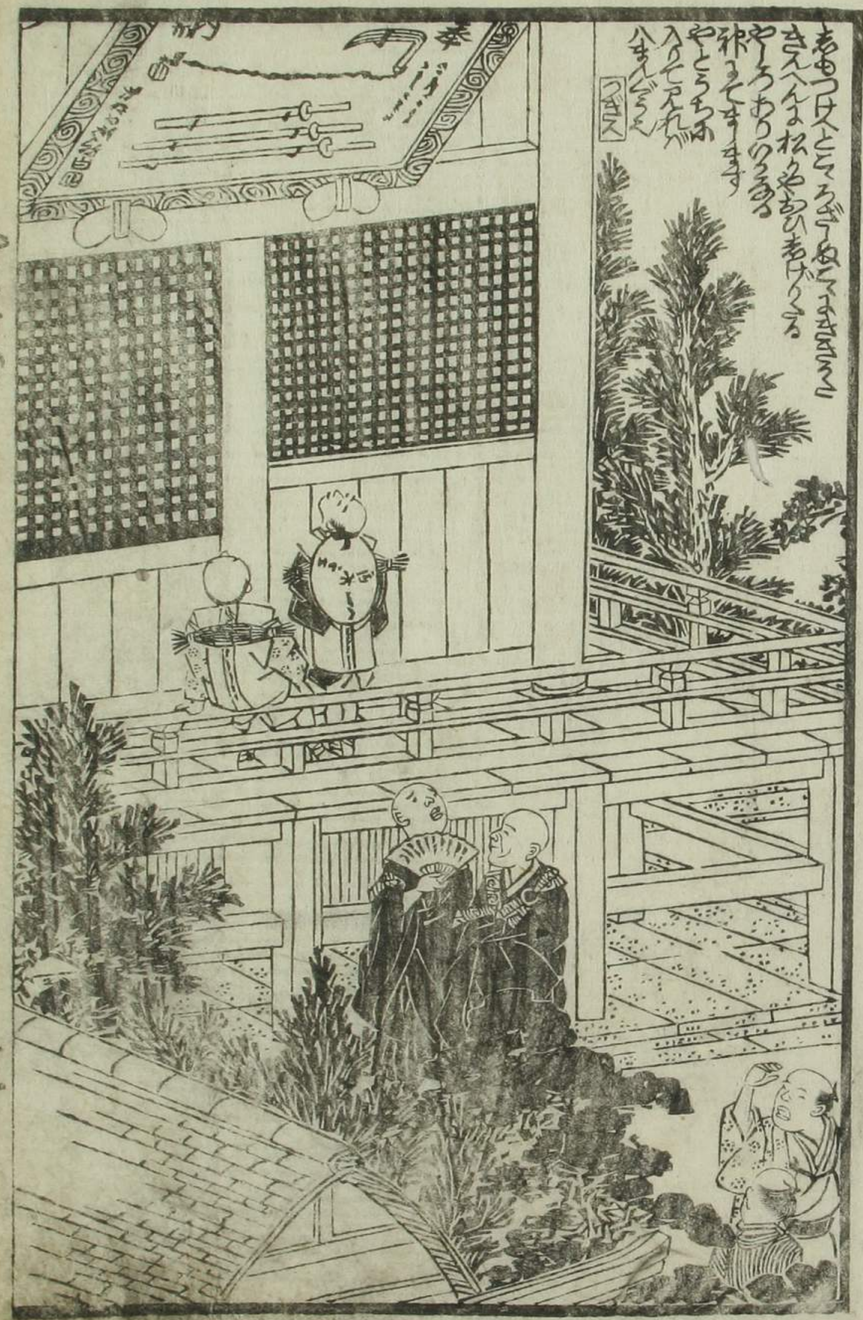
雅俗百傳奇

大本全五冊繪入 平假名附 近刻

この書は雅とも俗ともその行状の奇なる古今の列傳を輯録して勸懲の一端とす されば忠孝義烈尚氣節操の世に提れたるより隱逸名聞技藝好事のともがらまで得るに随て漏さず是併善を見ては其進んことを欲し悪を警んとその為なり巻中毎傳出像ありて奇を見るに至り又評語を加へて繙くに覺ず巻を卒る異聞瑰奇の珍書なり

右書目共遠からず出板仕候 江戸通油町書林 仙鶴堂小林喜右衛門印行

つぎは　そのうハ三人べそそく
ぴ五ゝあもこけるところよ
ッせのてっぽう
あとさうくひきちゃう
ちんそことうちゃうとまい
さそいとこうえうまい
ふくげん立まのぶくとも
ろの男いまをすうとこひきさう
それがぐそのちゃうちんがろこい
あそせーらくもこーやとつぐくしろ
そ米こものでれがろびすぐまろとそる
こうえうとこーやくのつぎをぬって
きろてらくもとうまいすくこひっぷ一トあて
あそれがそのまくよきぐろーとこれけりとのぬい
すでまさこうさんとせーがのやくくるる大あくぎそう
ムせのの一ちひとこうきるもやあ子ーるぐ
うきあとうすべーとてらの三人のくるまを
それがこひまたつけあそのとてまーきろ
さいをこにすまいのたまさこきあちく
とーとかさりりくそこうまたらく夜ぞろ
くさそみちをのそぐやどよおうまろ
あうろまくこちゃーて所のこまま
れあちこさよくこれがをうあく
このあくともやそこうぞへのぐりー
るまあせらこうくことのようこと
つまこのめのぐりにぬ日こうこう
くそれよりあうのをあろ　こうま



あもつけとこうぐぬとてまたこう
きえへんまれまあひあげくる
やろありのこうる
祢うてまーます
やとうちゃ
入りてそれが
八まんぐうこ

つぎは

つゞき

虎

孫子要書
弥

つゞき

文政十四辛卯春　鶴屋喜右衛門板

御免江戸暦開板所

毎年十月下旬頃より麦初め中旬仕舞

載陽帖

南山禅師書　東海道　木曾海道

道法早算用道中記

一枚摺

新撰　日本名所之繪唐紙摺一枚　蕙齋鍬形紹眞筆

新撰　女古状揃園生竹　大本半紙本　両品出来　高井蘭山編撰

還塊紙料

柳亭種彦隨筆　古画入二冊

田喜菴輯

芦のしたもえ

芭蕉翁門人山雨居の園湖水石山の景を画く作の例

玄同放言初編二編共三冊

裝丰翁筆

右ハ三編三冊ハ玄同の放言ハ初編ハ古書日物見る分の中より抜て詳に考れ者ハ二編に分つ

三畝草木校輯 芳州集 全二冊 板行三百部 文化十年 刻於仙台

同輯 蘭集 全二冊 追刻 刻於仙台

歡童戲筆 遊言画手本 一名 鳥羽繪早まなび出来

廣益懷中早割大全 小本一冊 上達部

塵劫記

新形染彩目 植花手引 前北齋為一筆 後編嗣刻 先々はふ紙こらせ〜 奇ぶるり

芝居役者似顔早秘百古 後編 全一冊五渡亭國貞画

八文字自笑評 三箇之津 役者評判記 全 三冊 藝品定 天和二年

即考百籤 全 一冊 籤箱深川

傾城水滸傳 初編〜十編上帙 追善会 文政十年〜十編下帙 文政十二年 追加彩板寅九月 歌川國安画 曲亭馬琴作

合物端歌弾初 全一冊 柳亭種彦校訂 笠亭仙果作 歌川國貞画

いろは分 江戸乃名所 初編四冊 歌川國安画 三九作 東海道五十三次 花の都路 緒大人 絵本 全一冊 在歌入 歌川國貞画

矢猛心兵交 全十冊 歌川国安画 五柳亭徳升作 江戸名所東鑑 蕙齋筆 内 全三冊 閑田川西産覧 北齋筆 内 全三冊

春狂言惡鏡 全六冊 歌川豊国画 恋川春町作 江戸名所物見丘清長筆 内 全二冊 右四通共板上品にして高麗に絵 歌川進物板物彩板 絵かなり

傾城紫田舎源氏 初編〜三編上板 木焼失 分再板出来 西編〜六編 近年彩板寅九月〜妻部 歌川國貞画 柳亭種彦作

美艶仙女香罕有 仙女香坂本氏製 黒油美玄香罕有 坂本氏製

書物錦繪 江戸通油町 團扇地紙問屋鶴屋喜右衛門